教職課程に発気揚々
大鳴戸親方
中大法学部時代の三足のわらじ

「出る出る出島」と表現された前へぐいぐい出る取り口で、人気と実力を兼ね備えた元大関出島武春関（40）。現在は大鳴戸親方（藤島部屋）として指導者となり、大相撲の本場所では審判委員を務めている。テレビでおなじみの同親方は中央大学法学部法律学科在籍時代に教職課程を取っていた。授業、教職課程（中学・高校の社会）、相撲部の稽古、試合。“三足のわらじ”をどうはいていたのか。

藤島部屋玄関前で

私の学生時代

教職課程に発気揚々
大鳴戸親方 中大法学部時代の三足のわらじ

テッポウ

股割り

――先生になろうと思ったのは

大鳴戸親方「就職口として考えていました。僕らのころから不況だ、就職難だと言われ始め、相撲やっていても実業団という就職先がほとんど採用しなくなってきました。田舎の親は地元に帰って就職してほしいと思っているでしょうから。教師ならばいいですよね」

≪同親方が4年生だった平成7～8年の景気≫経済対策閣僚会議は平成7年9月20日付で発表した『経済対策』で次のように表現した。「平成5年10月に景気の谷を迎えて以降、その景気回復のスピードは過去の回復局面と比較しても極めて穏やかであり、最近の景気は足踏み状態が続くなかで弱含みで推移している。特に雇用面や中小企業では厳しい状態が続いている」

――中学時代から全国的に知られる存在で、引く手あまたと思っていました

大鳴戸親方「大相撲は怖いところ、厳しいところと思っていましたから、僕なんか挑戦してもどうせモノにはならない。先生は幼稚園から始まって身近な存在で、尊敬していた先生もいました」

――教職課程のスタートは2年生からですよね

大鳴戸親方「法学部は学部授業と教職課程が全く違う履修ですよ。文学部では学部授業と重なる科目があるようですが、そんなこと知らなかったので、文学部に入っていたらよかったと思ったことがね、ありましたよ」

≪教職課程科目≫次の文中の※印は学部の卒業単位には含まれないものの、教職のために追加で履修しなければいけない科目。

▽2年次　教職概論、教育学概論1（教育の理念及び歴史）、教育心理学、教育学概論2（教育の社会的基礎）、道徳教育の指導法、※日本史概説Ⅰ、※自然地理学Ⅰ、※日本地誌学、※世界地誌学、※自然地理学Ⅱ

▽3年次　教育過程論、教育の方法と技術、生徒指導論、特別活動の指導法、教育相談と進路指導、社会科教育法、※人文地理学Ⅰ、※哲学概論、※倫理学概論、※日本史概説Ⅱ、※西洋史概説、※人文地理学Ⅱ

▽4年次　※教職実践演習（中・高）、※社会科教育の指導法、※教育実習1、※教育実習2、※東洋史概説

稽古をを見つめる大鳴戸親方

――時間割が埋まりますよね

大鳴戸親方「そうですね、けっこう埋まっていました。教職課程では面白い先生がいました。ほとんど脱線する先生もいた。なかにはこの授業は教員になるのに関係があるのかなと思う科目もあった。大学の授業って長いでしょう。1時間なら出ようか。稽古があって、しんどくて、授業をさぼる日が増えて。授業に出ないで単位を取るには、なんて考えたことも。勉強する身としてはこんな考え方、いけないですよね」

――相撲部に教職課程を取っている人はいましたか

大鳴戸親方「大勢いましたよ。同期には高校教師をしている友人がいます。女子校でね、彼は商学部でした」

落とし穴

――同じような環境ですとお互いに励まし合って

大鳴戸親方「それがね、落とし穴があるんですよ。みんなが学部授業と教職課程を取っているから簡単に資格が取れると思ってしまう。2年生、3年生、4年生と続けてきて、あれは4年生の前期試験前でした。三足のわらじに無理がきた。あんまり頭がいいほうじゃなかったので単位がだいぶ残っていました。教職課程と学部授業の再履修が重なることが多く、両方は難しいと判断し、卒業を優先しました。途中リタイヤです。三足のわらじをはいたと言えればカッコいいのでしょうが、どこか抜けていたほうが可愛がってもらえるのかな。完ぺき過ぎると意外に嫌われますものね」

――断念したときは随分と考えたのでしょうね

大鳴戸親方「いいえ。まずは卒業、4年で卒業です。親はそう信じているでしょうし、これ以上負担をかけてはいけない。社会に出て、あの人卒業していないんだって、と言われたくはないですよね。大相撲では大学の卒業証書は何ら関係がないですが、卒業にはこだわりました。自分だけの問題ではありません。4年で卒業しないと高校生に対するスカウト活動に支障をきたす。親御さんから、あそこに入っても卒業できないよ、なんて言われたらいけない。こうした情報はすぐに広まりますからね」

私の学生時代

教職課程に発気揚々
大鳴戸親方 中大法学部時代の三足のわらじ

巨人・沢村投手

――親方は法学部法律学科卒業ですよね

大鳴戸親方「在学中はそんなに感じなかったのですが、卒業してからびっくりしました。いろんなところへ行きますが、行く先々で『私も白門です』と声をかけていただき、応援してくださる。大学って凄いなと思います。ありがたいです。同期では天秤バッジ（弁護士）を付ける人、銀行マン、鉄道マン、会社経営者、教師もいます。いまだに天秤バッジ目指して勉強している仲間もいます。沢村投手、きのう勝ちましたね」

≪巨人・沢村拓一投手も中大の出身≫
8月28日、巨人―阪神戦（東京ドーム）で1年2カ月ぶりの完封勝利、今季2勝目を挙げた。白星は7月6日以来。沢村投手は平成23年卒。

大鳴戸親方「彼はこの1年半ほど、いい勉強をしたと思いますよ。やはりプロは学生とは違う。相手は下位打線といっても凄い選手ばかり。足踏みしたぶん、しっかり地を固めて、高く跳び上がるようにすればいい」

――応援メッセージですね

大鳴戸親方「講演で子供たちによく話をします。流した汗はうそをつかない。夢という樹を育てましょう。夢という樹は努力という名の肥料が必要です。その樹は枯れやすく、もろいです。小さな樹、大きな樹、なんでもいいです。肥料を与え続けて、夢という樹を育てましょう。いまの子供たちは余裕がない、時代に余裕がありませんからね。先生方に話を聞くと、型にはめ、枠から出さない、前へ倣え、右へ倣え、みんな仲良し、和を大切にといった感じ。だから社会に出てびっくりする。みんな仲良しではない。エリートほど鼻をへし折られると、もう這い上れない。昔は傷つき、傷を治しながら大きくなっていった。傷つくことも成長ですよ。免疫力がついて少々のことではへこたれない」

若手力士たちを指導する元大関武双山の藤島親方（右端）

――環境が人を成長させるんですね

大鳴戸親方「僕はたまたまいい指導者に巡りあった。先生を尊敬して、指導についていった。英語はダメだったな。先生とうまくいかなくて。思春期で、さ細なことでしたが、英語が嫌いになった。先生の力は大きいです。違うところへ行っていたらどうなっていたか。どんな人生になっていたかと思うと怖いような気がします。大相撲に入ってバッと駆け上がって順風満帆のように見えますが、やっぱり苦労もあったし、人のやらないこともしました、稽古でね。考え方も変えました。入門時は学生時代のことを忘れ、いままで習ってきたことが通用しない世界と思い、別物と考えました。手を汚さずにつかもうと思ってもつかめないものがあるんです。若いうちから苦労して、いろいろなものをつかんで、その中から手の汚れないやり方を覚える。手を汚してでも、つかみたいものもあります」

――ご苦労なさったのですね

大鳴戸親方「僕らは習うより慣れろの世界。毎日毎日、体で覚えていく。脳みそで考えて動くのでは遅いんです。私も何番か経験がありますが、立ち合い、頭でぶつかって脳振とうを起こす。意識が飛ぶ。飛んでいても相撲を取っている。勝ったけれども、記憶がない。それくらいまで体に覚えさせる。教育の場とは違いますね」

大鳴戸武春親方（おおなると・たけはる、元大関・出島武春関、でじま=本名）日本相撲協会年寄（委員＝審判部、指導普及部）、藤島部屋。石川県金沢市立工業高―中大法学部卒。高校時代は高校横綱、高校総体優勝、国体でも優勝した。13年半に及んだ大相撲の生涯戦績は595勝495敗98休、優勝1回。平成11年七月場所、13勝2敗で並んだ横綱曙との優勝決定戦を寄り切りで制して初優勝。三賞全て受賞。場所後に大関に昇進した。殊勲賞3回、敢闘賞4回、技能賞3回。最高位大関。平成21年7月引退。昭和49年3月21日生まれ、石川県金沢市出身。

大鳴戸親方　インタビュー

出島先生に習いたかったナ

学生記者　伊坂理花（法学部4年）

「教職課程を経て、大相撲で活躍する力士」―その意外さに最初は耳を疑ってしまった。元大関出島関・現大鳴戸武春氏(以下親方)は学生時代、厳しい相撲の稽古はもちろんのこと、法学部の授業に加えて「社会」（中学・高校）の教職課程にも挑戦した人である。残念ながら4年生の夏に教職課程は断念するも、その経歴はやはり興味深い。「今まで教職課程の話を交えたインタビューなんてなかったですよ」と語る親方に話を伺った。

実は今回のインタビューが私の学生記者としてのデビュー戦であったことから、まずはありきたりな質問を親方にぶつけてみた。

「中央大学での教職課程が生きていることはありますか?」

「ないな」

動揺を隠せなかったのは言うまでもない。というのも、現在は藤島部屋にて後輩力士の育成に全力を注ぐ親方である。当然ながら「YES」という返答を想定した上での質問であったからだ。よくよく話を聞いてみると―。

「若いお相撲さんの指導と教職課程で学んだことは全く別物。小学生には小学生の指導方法があって、中学生には中学生の方法がある。それらを一緒くたにはできないのと同じ」

堂々とした風格で端的明快な返答。相手を納得させるのが実に上手い人である。

その一方で「そもそも自分は教職課程をリタイアした身。でも完璧より愛嬌があるでしょ」と笑顔で一言付け加え、雰囲気を和らげる気配りも忘れない。話のさじ加減に親方の器の大きさが垣間見える。

親方と学生記者（右）「サインをいただきました」

「夢。努力。一生懸命…。」

力士として酸いも甘いも経験してきたことはもちろん、このように知性も持ち合わせた親方だからであろうか。インタビュー中に発せられた言葉の数々は、私の心に刺さるものばかりであった。2つ紹介したい。

1つ目は、学生時代に友人に勉強が出来ないことを指摘され、「ペンとまわしの差だ」と胸を張って応じたというものだ。相撲に全身全霊を傾けていた当時の親方らしい言葉である。そこまで堂々と自分のすることに自信をもつ相手を前に、友人もさぞかし返す言葉に困ったに違いない。

そして2つ目は、親方が講演を依頼される際に小・中学生に対してかける言葉である。「流した汗はうそをつかない」「夢という樹は努力という名の肥料を与えないと枯れてしまう」これらの言葉を自己啓発本かなにかでサラッと目にしていたら、ここまで意識することはなかったかもしれない。だが、圧倒的な存在感をもって、学生記者の心に迫るものであった。

そもそも今、自分には夢があるのだろうか。そして「夢に向かって努力をする」というある意味、単純なことができているとは言い難い現状に一種の寂寥感を覚えたのである。

大学4年生になり、将来の進路も決まった今、この上ない刺激的な言葉を親方から頂戴した。

金星と言われちゃった

今回、親方へのインタビュー前、学生記者はお言葉に甘え、藤島部屋で朝稽古を拝見した。稽古場を訪れるのは初めて。それどころか生で相撲を見るのも初めてだった。

若手力士が「ハア」「ハア」と過呼吸状態のように陥りながらも一切休むことなく鎬を削る。その力士に対して師匠である藤島親方（42）=元大関武双山関＝が威厳をもって指導する。異様なその雰囲気に正直おののいた。

私の学生時代

教職課程に発気揚々
大鳴戸親方 中大法学部時代の三足のわらじ

野球賭博問題（2010年）、八百長問題（2011年）と相次いだ不祥事。以前には表彰式にも女性を土俵にあげないという女人禁制などが重なって、快く取材に応じていただいた大鳴戸親方には心底申し訳ないと思うが、私は世間を騒がしたニュースから大相撲に対して上記のような印象を抱いていた。

だが、今回自らの目で相撲を見て考えるところがあった。

大相撲はスポーツではなく神事である。そして番付という階級社会の元、明確な上下関係が広がる。土俵の上では、学歴も年齢も全く関係がない。まさに魂と魂のぶつかり合いである。

確かに男女平等が叫ばれ、先輩後輩の概念が曖昧になりつつある今日で、相撲界は特別であるかもしれない。改善されるべき部分も多々あるのかもしれない。だが、あの土俵の上での力士の懸命な姿を見た今、大相撲が国技であって、日本が誇るべきものであるゆえんが分かるような気がしたのである。

さて、話を親方に戻すと、結局親方は教職課程を終え、社会科教師として教壇に立つことはなかった。その代わり現在は、土俵で後輩の指導に当たる。本人には伝えなかったが、インタビュー中「こんな先生がいたら良かったな」と始終思っていた。

親方は私に稽古場を見せ、相撲の魅力をそれとなく伝え、機知に富んだ素敵な言葉をかけてくれる…。

まさに理想の教師像ではないだろうか。インタビューの最後、親方はこう言葉をかけてくれた。

「伊坂さんは金星だね。星を集めて、相撲を見に来てくださいね」

相撲界では女性のことを星というそうだ。記者は照れながらも「はい!」と応え、学生記者としてのデビュー戦は幕を閉じたのである。

激しいぶつかり稽古が続く

もっと知りたい

「金星」とは、本来平幕力士が横綱を倒すこと。番狂わせにファンは大きな拍手を送る。出島関には6個の金星がある。

電子書籍アプリ『白門書房』

『白門書房』は、中央大学が発行する広報誌を集めた、日本の大学初の電子書籍配信アプリです。

『HAKUMON Chuo』のバックナンバーはもちろん、これまで印刷物のみで配布していた中央大学の大学案内誌や学部ガイドブック、大学院・専門職大学院案内、附属学校案内などを、電子ブックの形式でダウンロードできます。

利用方法は簡単。Apple Inc. が運営するiPhone、iPod touch、iPad向けソフトウェアのダウンロードサービスであるApp Store（アップストア）から『白門書房』をダウンロードします。Appストアへは、無線LAN（Wi-Fi）を通じてどこからでもダウンロードできます。

『白門書房』をダウンロードすると、あらかじめ本棚に収められている大学案内他4冊の広報誌を読むことができます。ダウンロード後は、インターネットへの接続環境がなくても、電子ブックを開くことができます。

過去のバックナンバーや他の媒体を読みたい場合は、3GやWi-Fiを通じて「ストア」にアクセスし、何冊でもダウンロード可能です。

なお、同様のサービスをAndroid版でも提供しておりますので、ぜひご利用ください。（Android4.0以上推奨）

本電子書籍・ドキュメント配信システムは、電子書籍出版社である想隆社が開発したものであり、今後も、新刊本発刊次第、順次電子ブックで提供する予定です。

『白門書房』アプリについての詳細は、以下のサイトよりご覧いただけます。

http://itunes.apple.com/jp/app/id413465097